

表2 「自立活動（コミュニケーション）」における実態把握表の例

① 《一緒に遊ぶ時のやりとり》

*チェック欄に○を付ける。その項目は児童生徒の活動意欲の高まりを示す。

遊ぶ時のやりとり	チェック	課題の時のやりとり	チェック
相手の手元をじっと見る		スケジュールを見る	
相手が使っている道具に手を伸ばす		活動のコーナーに自分から入る	
相手の手を取って道具をとろうとする		何をするのが分かり、混乱の様子が見られない	
おもちゃなどを相手から受け取る		相手がしていることをじっと見る	
おもちゃなどを相手に渡す		相手が何かを指差すと、その物を見る	
相手の顔を見る（表情を確認する）		「ください」と言われると相手に渡す	
相手の近くで遊びたがる		視線・身振りで意思を伝える	
相手と一緒に遊んでいる時に、声を出したり笑ったりする		困ったときに「手伝ってください」と伝える	
相手の真似をして遊ぶ		相手がモデルを示すと、その意味が分かり真似る	
相手と身体接触を求める		できたときに、相手の顔を見る（表情を確認する）	
活動を続けたがる		設定した時間いっぱい活動する	

心理的な安定	チェック
手を噛んだり、たたいたりせずに（自傷行為）場を共有できる	
相手を押ししたりたたいたりせずに（他害）場を共有できる活動の場にいる	
あちらこちらに視線が移らない	
表情が穏やかである	
活動に集中している時間が長い	
積極的に活動に取り組む	

感覚について	チェック
おんぶや抱っこが好きである	
手足や頭などを触られることが好きである	
揺れたり、回ったりすることが好きである	
聴覚が過敏である	
キラキラ光る物や、点滅する光を眺めるのが好きである	

② 《見通しをもって活動するための支援》

*表①で○が付いた項目から、見通しをもつための支援の様式等を考えることもできる。

見通しをもつための支援具の様式の例

支援具の例

具体物	移動型オブジェクト		例 ○	直接活動で使う物		活動の象徴となる物	
	写真	写真		具体物	具体物	具体物	具体物
カード	覚えておくことが難しいので、写真カードを活動場所まで移動させて使う。			活動に使用する物		活動を示す具体物	
	めくりタイプ	活動が終わったら、カードをめくる終わりが分かりやすいように、「おわり」のカードを付ける		半具体物 具体物を貼り付けた物		半具体物 象徴となる具体物を貼り付けた物	
	アコーディオンタイプ	全体の活動内容をとらえることができ、現在進行中の活動が確認できる		シンボルマーク 具体物を記号化した物		シンボルマーク 象徴となる物を記号化した物	
				写真 活動の写真		写真 活動の写真	
				ミニチュア 児童にとって分かりやすい具体物を小さくしたもの		ミニチュア 児童にとって分かりやすい具体物を小さくしたもの	

(1) 「遊びの指導」における実態把握表 (p. 130表1)

肢体不自由養護学校小学部の重度・重複障害児学級に在籍する児童を対象とし、作成した。作成上の観点としては、①遊びの活動における体の動きや感覚について、②コミュニケーションについて、③意欲の高まりを見取るポイントについて、の3つが最低限必要と思われる。①で遊び方や使用する遊具についてのヒントをつかみ、②でコミュニケーション手段の確認を行うことができる。さらに、③を基に、授業場面において児童生徒の活動意欲の高まりを見取ることができるようになっている。使用するに当たっての留意点を、以下に示す。

ア 単元計画を立てる段階で使用する。年間に2回の単元を計画するときは、それぞれの単元で使用する。1回目と2回目では、児童生徒の実態が変わる場合もある。また、長期間行う単元で、途中で児童生徒の実態に大きな変化が見られた場合は、計画を変更した方がよい。

イ 1人の支援者だけではなく、できれば児童生徒にかかわる複数の支援者で記入し、見取り方の違いがあるときは、話し合って共通理解した方がよい。

ウ 日常の児童生徒の様子から必要と思われる観察項目については、適宜付け加えて使用する。

(2) 「自立活動（コミュニケーション）」の実態把握表 (p. 131表2)

前言語段階の自閉症児を対象とし、作成した。作成の観点としては、①コミュニケーションについて、②見通しをもつための支援について、の2つが必要であると思われる。①でコミュニケーション手段を確認し、②で見通しをもちやすい方法をつかむことができる。さらに、①を継続して使用していくことで、児童生徒の活動意欲の高まりを見取ることができるようになっている。使用するに当たっての留意点を、以下に示す。

ア ①は、活動中の児童生徒の姿を分析しながら記入し、それ以降の学習課題や活動内容を決定する際に生かしていくようにする。

イ ①、②共に、活動内容にもなっているので、次のステップを見通しながら活用する。

ウ ①、②共に、単元計画を立てる段階と、単元終了時の2回は使用する。その日の児童生徒の状態によって、或いは、支援者によっても結果が違ってくことも考えられるので、2人以上で記入し、共通理解した方がよい。

2 今後の課題

- (1) 実態把握表作成上の観点を明らかにし、活動内容に応じて改良していく必要がある。
- (2) 「遊びの指導」「自立活動（コミュニケーション）」の一分野だけの実態把握表なので、今後、領域や教科等を広げていく必要がある。
- (3) 個別の児童生徒へのかかわりを通して作成した実態把握表なので、発達段階が絞り込まれている。今後、児童生徒の発達に応じた見取りに必要な視点を明らかにしていくことが求められる。

《参考文献》

- ・ 遠城寺 宗徳 『遠城寺式・乳幼児分析的発達検査表（九大小児科改定版）』
慶應義塾大学出版会 1977年
- ・ 旭出学園教育研究所・日本心理適性研究所
『新版S-M社会生活能力検査』 日本文化科学社 1980年
- ・ 小林 芳文 『ムーブメント教育実践のためのムーブメント教育プログラムアセスメント』
日本文化科学社 1985年
- ・ 小林 芳文監修 『乳幼児と障害児の感覚運動発達アセスメント』 コレール社 1992年
- ・ 坂本 龍生 『絵でわかる障害児を育てる感覚統合法』 日本文化科学社 1991年